

## 特集 学生の研究活動報告－国内学会大会・国際会議参加記 27

### ASEAN グローバルプログラム に参加して

寺村 駿吾  
Shungo TERAMURA  
物質化学科 2年

#### 1. はじめに

2017年8月29日から9月7日にかけてベトナムのハノイ、シンガポールにおいて10日間のASEAN グローバルプログラムに参加した。本プログラムの簡単な研修日程を表に示す。

表 研修日程

8/29 (火)	ハノイ着 オリエンテーション
8/30 (水)	企業訪問
8/31 (木) ～9/1 (金)	ベトナム人学生交流 PBL
9/2 (土)	ベトナム観光
9/3 (日)	シンガポール着
9/4 (月)	南洋理工大学訪問
9/5 (火)	講演会
9/6 (水) ～9/7 (木)	シンガポール発 関西空港着

#### 2. 志望動機

私がこのプログラムに参加しようと思った動機は主に二つあった。一つ目は、英語でコミュニケーションをとることによる英語力の向上をはかるため、二つ目は、就職するにあたって最も必要とされる行動力やコミュニケーション力を向上させるためであった。

#### 3. 現地企業の訪問について

シンガポールでのプログラムも充実したものであったが、本稿ではベトナムのプログラム、特に現地企業の訪問について述べる。このプログラムは8月30日、企業訪問というかたちで Rikkei Soft と NTQ

Vietnam を訪問した。私はまず初めに Rikkei Soft に伺った。Rikkei Soft という企業は主にアプリケーションやゲームの開発がされていて、立命館大学と慶応大学を卒業したベトナム人が起業した会社である。

まず最初に会社説明をして頂いたが、説明された方はベトナムの方であるにもかかわらずすべて日本語であり、おそらく普段私が話しているよりもきれいな日本語で、非常に感嘆した。会社説明された方以外にも日本語を話せる方は数人いて、会社説明のあとはその方々との交流会があった。その交流会ではほとんど日本語で会話できた。5人の方と交流したが、5人全員が日本へ留学した経験を持っていて非常に流暢に日本語を話されていた。こんなに日本語が話せる従業員がおられるのなら、もし私がここで働いてもコミュニケーションには困らないのではないかと考え、日本人でも雇ってもらえるかという質問をしたところ、「日本人を雇うのは難しい。日本人は勤勉だが無難な選択をしがち、逆にベトナム人はチャレンジ精神が強いためそれが成功すると会社の急激な成長をはかれる。」と、コミュニケーションではなく日本人の特徴について否定されたような返答が返ってきた。悔しい一方で納得させられる側面も感じた。それは、私もこれまで無難な選択をしてきた日本人の一人であるからで、学生である間は多少のミスは許される時期であるため、これからの大学生活ではいかなることにもなるべくチャレンジしていかなければならないと感じた、そうやってチャレンジしていくことで今まで気づかなかったことに気付けるかもしれないし、苦手なことも克服できるかもしれない。チャレンジするという事は大切なことで、自分の成長に必要な不可欠な要素なのではないかと考えさせられた。

次に伺った NTQ Vietnam は Rikkei Soft 同様にアプリケーションを開発している会社であった。ここではまず日本人スタッフである越野様にお話を頂いた。越野様は NTQ Vietnam で働く数少ない日本人の方で、「言葉の壁はやはりあるが、低コストを維

持するためには日本人社員を派遣してもらうのは厳しいからこのままやるしかない。」とおっしゃっていた。言葉の壁をなるべくなくせるように英語をさらに勉強していかなければならないと思った。その後は開発部の部長の方と通訳の方を介しての交流であった。この交流会では NTQ について様々な質問をし、答えていただいた。また開発している風景も見せていただいた。ベトナムにおいて残業は一般的ではないようだが、この NTQ の社員の方々は強く向上心を持っているため残業する社員も珍しくないとおっしゃっていた。通訳を介して話すというのはあまり経験したことがなかったためとても新鮮であった。

この二つの企業訪問を終え、チャレンジすることと言葉の壁をなくすために世界共通語である英語は最低限マスターしなければならないと実感した。行く前はこの企業訪問で何が学べるのか想像できなかったが、思っていた以上に色々なことを学べ、良い体験ができたと思う。

#### 4. PBL について

ベトナムでのもう一つのプログラムが、二日間にわたって行われた PBL である。PBL とは Project Base Learning の略で、チームを結成し与えられたテーマに従って制限時間内に仮想的な仕事を体験するというものである。

今回はこの PBL を龍大生 5 人とハノイ工業大生 2 人のチームで行い、テーマは“ベトナム市場でユニクロの商品を売るには”というものであった。日本人だけで行うのも難しいのに、英語で、さらにベトナムでの調査ということで非常に困難だった。は

じめはベトナム人学生の英語についていけなかったし、言いたいことがあっても英語で言えないし、全くうまくいかなかった。そこで話している人の目を見るようにした。するとなんとなくいっていることがわかってきて、最終的には聞くことに関しては大部分を理解できるようになった。話している人の目を見るという基本的なことをするだけでなんとなくコミュニケーションが取れるというのを体感した。

PBL という困難な経験をしたためか、終了時の達成感は非常に強かった。PBL の最大の要点は時間内にやるということで、時間内にやるのが集中力を持続させさらにチームワークを強めているのだと理解した。

#### 5. おわりに

本プログラムに参加して、目標であった英語力の向上は少しだけ達成できたと思う。また、日本だけに留まらず、ベトナムにも友達ができ、コミュニケーション力は上がっていることが実感できている。この目標であった二つのことが少しでも達成できたことが成長につながり、その成長がまた新たな課題と向き合うことでより大きな成長へとつながると考える、そのことに気づけただけでもこのプログラムに参加して良かったと思えるし、この経験を踏まえて新たなことに挑戦することのきっかけになると考え、今後が楽しみである。

今回の ASEAN グローバルプログラムという企画を立ち上げ実行して下さった関係者、そして本プログラムに携わって下さった皆様に感謝御礼申し上げます。